一緒に住みたい仲間と共同でつくる夢のマイホーム

コーポラティブハウス

「十方舎」ズームイン

無限の夢ん中に

アパートの狭苦しさ、マンションの息苦しさにくたびれた人たちに提案。「コーポラティブハウス」はいかが。一緒に住みたい仲間と共同で、個性を生かしてつくる新しい形の住宅だ。東京では、十世帯の共働き家族が力を合わせて、十軒で一つのマイホームをつくり、豊かな住み心地と交流を楽しんでいる。「おしょうゆ貸して」の会話がよみがえった"現代版長屋暮らし"を紹介しよう。

まるで"美術館"

コンクリートのさらさらした地色をそのまま、吹き抜けにした壁に、スポットライトを浴びてセザンヌや自作の絵が浮かび上がる。コーポラティブハウス「十方舎」の住人の一人、佐藤由久さん(四六)＝建築会社勤務＝宅の十五畳ほどの板張りの居間は、さながら美術サロンかギャラリー。「こんなくつろげる空間を自分で設計するのが長年の夢でした」と佐藤さん。

片や、登山家の足立久男さん(四二)宅では、「岩登りの練習に」と吹き抜けの天井からロープと縄ばしごをつるした。ご本人よりも足立家や十方舎中の子供たちの格好の遊び場になり、にぎやかな笑い声が絶えない。

全家族がそろった先月末には恒例の交流会が開かれ、ミニ運動会、もちつき大会、忘年会とう。

アイデアがいっぱい 広がる触れ合い空間

ウサギ小屋返上

「子供が大きくなるし、そろそろ広い家が欲しいわ」「でも大変よ。高いし遠くなるし、共働きもできなくなるもの」。昭和五十七年、足立区内の同じ保育園に子供を預ける三人の働く主婦のこんな会話が、十方舎誕生のきっかけだった。

一日中大にぎわいだった。「実家でとれたもち米で、おいしいおもちができました」と、宮城県蒲谷町出身の佐藤万亀子さん(四四)＝由久さんの妻＝も満足そう。

その一人、萩原幸さん(四七)のご主人正道さん(四七)が建築設計士で、コーポラティブハウスの知識を持っていた。話を聞いて「やってみよう」と三家族が賛同、土地仲間探しに奔走した末、翌年夏に建設組合が発足した。

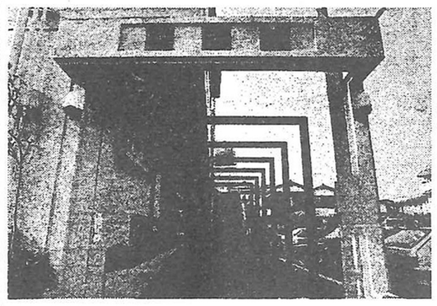
「家族五人で窮屈な都営住宅暮らしでしたから、仲間募集のチラシを一目見て"面白い、これだ"と参加を決めました」。青森県中里町出身のタクシー運転手成田市義さん(四七)は言う。

互いに家庭や財布の中までオープンになる徹底的な話し合いと、家族同士の交流会を重ねる中で、運命共同体意識は育った。一番問題だった家の配置決めでは、全員納得するまで三度も投票を行った。十方舎は六十年三月に完成。費用は当時のマンション相場の二割安だった。

「四方八方十方へ夢が広がる」という名前の由来通り、十方舎には「快住」のためのアイデアがいっぱいだ。「今までの住まいの悪い点をまず改善した」（萩原正道さんと言い、壁は厚く床には防震ゴムを敷いた。採光の吹き抜けも二カ所設けて、暗がりを追放した。

家の間取りは十軒十様だが、大人二十人以上が集まれる場所を共通して持っている点が十方舎ならでは。「集会室なんか造らず、日ごろから家族ぐるみで交流しよう」という十家族の心意気が形になった。

「奥様専用の書斎だって、十軒中七軒にありますのよ」と言うのは萩原幸さん。家の全体にいつも目が届くように、と台所をフロアのド真ん中に据えたところもあり、主婦の主張がたっぷり盛り込まれている。



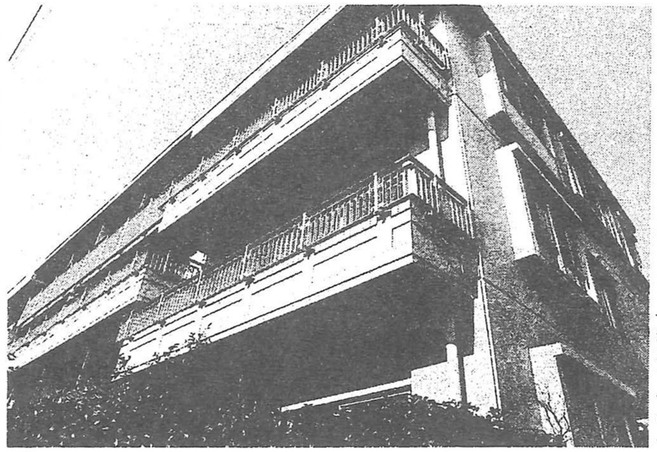
手づくり型コーポラティブハウスらしく「十方舎」は玄関も個性的だ

イベントも盛んに

十方舎には月一回、奥さんたちの夜の寄り合いがある。会場は持ち回りで、おいしいものを持ち寄り、子供の教育、ご亭主の愚口、共同生活をもっと楽しむ提案など、夜が更けるのも忘れて存分におしゃべりする。

「気心が知れた同士、多少の物音でも、互いの信頼で我慢できる関係ができているんです」（佐藤万亀子さん）。冬には貸し切りバスでスキー、夏には七夕の会、秋の合同ハイキング。マンションの孤独とは、ここでは無縁だ。

仲間の一人、永塚金治郎さんは六十二年暮れ、がんのため三十三歳で亡くなった。十方舎では、闘病生活を励まそうと、落語好きだった永塚さんを囲んで「出前落語」の会が催されたこともある。「東京の真ん中なのに、古里みたいなぬくもりがあるね」。ご主人と同じ津軽生まれ（西津軽郡車力村）の成田キヌエさん(四七)は言った。



外観は普通のアパートだが、中は個性豊かなマイホームが〝同居〟するコーポラティブハウス「十方舎」

家を建てたい人たちが何人か集まり、土地の購入から設計、工事発注まで、共同作業によってつくる方式の集合住宅。協同組合方式とも。

コーポラティブハウス

いい、団地づくりにこの方式を取り入れるケースもある。英国が発祥地とされる。

入居者が主体の住まいづくりで①一般の分譲マンションのように販売業者が介在しないため、実質でつくれる②入居者の希望が直接、計画や設計に反映できる③共同作業を通じて、入居者同士のコミュニケーションが、入居前からはぐくまれる―といった特徴、利点がある。

イラスト・えびなみつる

十方舎　ＪＲ常磐線亀有駅からバスで10分、東京都足立区佐野二丁目にある。現在20－40代の共働き世帯10家族42人が入居している。建物は、鉄筋コンクリート４階建て、延べ床面積約1,000平方㍍。住宅は、フラット型（ワンフロア）６戸、メゾネット（１、２階式）が４戸。１戸当たり83.38－110.48平方㍍。昭和59年５月に着工し、60年３月完成した。建設費用は、東京都のコーポラティブハウス建設資金融資などを含めて１戸平均約3,100万円。設計の相談、コーディネートを引き受けたのは「象（しょう）地域設計」＝電03（3601）6841＝。

日本のコーポラティブハウス運動に詳しい熊本大学工学部の延藤安弘教授（建築）によると、昭和五十年前後から全国で手掛けられたコーポラティブハウス（事業数）は、約二百五十件、延べ約五千戸にとる。

住宅事情を反映して、東京と関西に集中しているが、「十方舎」を代表格とする市民の手づくり型から、大勢の入居希望者を募集する団地型まで、形態はかなり多様化してきた。

現在、日本最大のコーポラティブハウスは、東京都住宅供給公社の「コープタウン松ケ谷」（八王子市、五十九年完成）。七棟の集合住宅（四、五階建て）に百四十二戸が入居している。絵画室、図書室、和・洋集会室など合計十四室もの交流スペースを設けているのも特徴だ。

やはり八王子市内に平成四年三月完成が予定される、住宅・都市整備公団の「八王子パークヒル宇津木台」は、日本初という「高齢化社会対応型コーポラティブハウス」が目玉。三棟七十六戸の住宅のうち約三分の二を、あらかじめ三世代同居世帯向けに基本設計し、入居希望者を募る方式だ。「お年寄り同士のコミュニティーづくりも大きな狙いです」（公団）。

手づくり型から団地型まで 東京、関西中心に5000戸

一方、「プール付きの白い家」という、だれもがうらやむ住まいを実現したのが金沢市の「ライブハウス泉ケ丘」（昭和五十五年）。同じ夢を持つ十五家族の市民が用地を探し、住宅・都市整備公団に建設を申し込んだ。

再開発による街づくりに、コーポラティブハウスを積極的に活用している自治体もある。神戸市住宅供給公社の「神戸・Ｉ（ワン）」がそれ。都心部のスラム化しかかった旧歓楽街地区を「人の住める街」に再生するため、商業、医療施設、オフィスと三十八戸入居のコーポラティブハウスを組み合わせた。従来の「住民追い出し」型の再開発と異なり、商店会など地元関係者が入居者の中心となる。

埼玉県上尾市では、同じ地区の地主三人が共同でアパートの建て替えを計画、周囲の借地借家人も一緒にこの計画に参加する、という住民レベルの再開発が動き出している。実現すれば「賃貸型コーポラティブハウス」の先駆けとなりそうだ。

神戸市ではまた、市民向けにコーポラティブハウスづくりのコンサルタント派遣事業も始めており、延藤教授は「こうした自治体のソフト面の支援も加わっていけば、コーポラティブハウスはこれから地方都市でも、街づくりに大きな役割を果たすだろう」と話している。